Osaka University Knowledge Archive

Title	バイオテクノロジー時代の主体性
Author(s)	倉持, 武
Citation	医療・生命と倫理・社会. 2007, 6, p. 12-16
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8687
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

バイオテクノロジー時代の主体性

倉持　武
（松本歯科大学教授、倫理学）

1．新しい技術と強化

胚・胎児のスクリーニング、精子選別、成長ホルモン、リタリン、プロザック、ボトックス、バイアグラやアナボリック・ステロイド――これら新しい技術や薬剤の多くは元来なんらかの手当てを必要とする人たちを助けたいという意図の下に発展してきた。しかし今日では、それらはさまざまな欲望を満たすために広く使用されるようになっている。さらに、痛ましい記憶や恥ずべき記憶から生まれる感情的色合いを抑える薬物、筋肉のサイズと強度を共に増加させる遺伝子注入、感覚機能と運動機能を共に強化するナノ・メカニズムの埋め込みが、おそらくは生物学的加齢を遅らせ、人間の最大寿命を延ばす技術もまた、まもなく到来するだろう。

非治療的な仕方でのあるいは欲望充足のための新しい技術の使用を「強化(enhancement)」と名付けたいと思う。またここで、「治療（therapy)」と「強化」を、2003 年の米国大統領生命倫理評議会報告『治療を超えて』で示されている考えに沿って、次のように定義しておきたい。「治療」とは、既知の疾患、損傷、障害を持った個人を、健康あるいは不都合のない正常な状態に回復させるための処置に、バイオテクノロジーの力を使用することである。「強化」とは、直接的な介入によって、疾患がたどる過程ではなく、人間の心身の「正常な」働きを変えるために、あるいは人間の自然的な素質としての能力や行為遂行能力を強化・向上させるために、バイオテクノロジーの力を直接的に使用することである[1]。

そのような治療を超えた新しい生物医学技術には現時点ですでに広く受け入れられているものがある。睡眠や覚醒、ダイエット、育毛、受胎調節のための薬、脂肪やしわを取り除くための、腿を引き締めるための、豊胸のための手術、歯科矯正法や子孫の性別選択法がそうである。欲望を満足させるために新しい技術が使用されている例を 2、3 取り上げてみよう。ハゲに対処しようとして、2002 年にアメリカ人は薬代としておよそ 10 億ドルを費やした。これは、世界中で数百万の人々を悩ませているマラリアの治療法を発見するための科学研究に使われている費用のおよそ 10 倍に当たる額である[2]。米国美容整形外科学会によると、同じく 2002 年にアメリカ人は美容のための処置を、1997 年の 210 万回の 3 倍以上になる、690 万回行って、そのために 77 億ドルを費やした。覚醒剤「リタリン」の年間生産量は 1992 年から 1995 年の間にほぼ 3 倍になり、1995 年から 2002 年の間に再び倍増した。2002 年の生産量は 20,967kg だったが、これから 1 錠当たり 20mg の塩酸メチルフェニデートを含むリタリンの錠剤を 10 億錠余作ることができる[3]。

２．同一技術の「二重使用」

同一の技術は治療と強化のために二重に使用することができる。たとえば次のようなケースである。

技術	治療的使用	非‐治療的使用
１）ヒトの初期胚に関する各種遺伝子の存否テスト	疾患の予防のために	我々が「よりよい」子どもを手に入れるために
２）筋肉の強度と遂行能力の押し上げ	筋ジストロフィーや高齢者の弱くなった筋肉の治療のために	競技者が優れた遂行能力を獲得するために
３）加齢の生物学的プロセスの制御	老齢期の心身の虚弱化を縮減するために	人間の最大寿命の大幅な延長を工作するために
４）記憶や感情を含めた、精神生活の改変	精神病の予防や治療のために	行為に伴う苦しみや恥じの感情の鈍麻、鬱的気質の改善、喪の哀しみの軽減・消去のために
５）人間の身体や脳に埋めこみ可能な精密ナノテクノロジー装置	視覚障害や聴覚障害の克服のために	人間の生得的な素質としての能力や意図的な行為遂行能力の強化のために

このように強化は人間増強一般の中のバイオテクノロジーを使用する形式のものである。たとえば遺伝子組み換えといった技術、たとえば DNA シーケンサーといった器械、たとえば新薬や新ワクチンといった製品によって、バイオテクノロジーは我々人間に、病気や不運、偶然や必然性への服従の度合いを減少させ、自分たちの人生に対してより大きな支配力を発揮できるような力を与えてくれる。

３．強化に由来する若干の問題

強化に由来する問題には複雑に絡み合っているものが多い。改善が必要なあるいは改善が望ましいと思える人間の運命とは、厳密にいって、本当のところどういうことなのだろう。一番に救済を求めている「人間の境遇」とは、厳密にいって、実際のところどういうことなのだろう。「改善」は、あれやこれやの悪の除外に限られるべきなのだろうか、それとも、美、強さ、記憶、知性、長寿、幸福そのものといった我々がもつ肯定すべき善の増強もまた含むべきなのだろうか。

問題が関わるのはバイオテクノロジーの力が獲得されることで達成される目的・目標なのであって、単なる安全性、効率性や手段の倫理性ではない。問題は人間の自由やよき生

の本性や意味に深く関わる。問題はいわゆる「超人化」の約束だけでなく、いわゆる非人間化の恐れと真正面からぶつかるのである。問題に取り組めば、人間であることや人間として生きていくことの意味から顔をそむけることができなくなる。つまり、それらは、人を対象とする研究におけるインフォームド・コンセント、医学研究の成果への平等なアクセス、価値ある目的を追求するための手段の倫理性といったような生命倫理でおなじみの問題を超えたところにある。要するに、強化は完全人間の夢、つまり人間共通の限界や個人の生来の欠陥を克服したいとする熱望と深く関わっているのである。

楽観的な見解を述べる者がいる。たとえば、DNA 構造の共同発見者であるジェームズ・ワトソンは、遺伝子を附加する方法を知ることで人間が改良できるなら、なぜそうしてはいけないのか、と述べている。全米科学財団（National Science Foundation）の 2003 年度報告には次のような宣言が記されている。「この技術発展史上の特別な時期、人間の遂行能力の改善が可能になり、そのような改善は、もし精力的に追求されるならば、人間の生産性と生活の質の転換点となる黄金時代を到来させるであろう。」そこで描かれているのは、生物学的に改良された資質を備え、遂行‐強化装置の助けを受け、自然と運命が課す拘束から自由になって、人類がこれまでに達成してきたどのレベルよりもより長く生き、より有能で、よりさまざまなことがらを実現し、より生産的で、より幸福な市民が生活する世界の絵図である。だがしかし、まさに新しい知識と新しい力が直接ぶつかるのが人間の人格であり、しかもそれがまさに我々の人間性に影響するかたちでということなのであるから、そうした企図全体にはある漠然とした不安感がまとわりついていて、簡単には引き剥がすことができないのである。

そうした懸念は次に挙げるような事柄の一つひとつについて示すことができるし、また実際に表わされてもきた。つまり、技術の安全性、福利へのアクセスの公平性や平等性、有利さの公平性や遂行される行為の真正性、顕わなあるいは隠された強制、社会の貴重な医療資源の誤使用、増大する人間活動の医学化、欲望操作、人間の本性改善の試みに潜む傲慢の可能性、適切な努力や訓練なしにバイオテクノロジーを通して「安易に」結果を得ることから生まれる性格への影響などである。その中でも、米国大統領生命倫理評議会議長レオン・R・カスは、非人間化あるいは自己疎外に関する懸念が最も本質的なものだと考えている。「我々の天与の力を、量の点でも洗練という点でも、改変する力が増大するにつれて、『自己疎外』の可能性――我々のアイデンティティーを見失い、混乱させ、放棄してしまう可能性――も増大する。私はよりよく、より強く、より幸福になるかもしれない――しかしどうしてそのようになったのか私にはわからない。私はもはや自己変革の主体ではなく、改変する力の受動的客体となる。人格があずかり知らぬ仕方で得た個人の功績は真にその人物の功績とはいえない」[4]とカスは言う。

４．天与の恵みに対する敬意

自然が与えてくれた世界に対する誤った理解と不適切な態度の典型である傲慢、超‐主体、人が神を演じることに関する懸念は、与えられたものに対して適切な敬意をはらうということで解消できるかもしれない。だが、与えられたものへの敬意あふれる態度は、押さえとして必要でもあるしまた望ましいものでもあることは間違いないのだが、それだけ

では十分な導きの糸にはならない。自然が授けてくれたものには天然痘やマラリア、がんやアルツハイマー病、さらにまた老化、老衰も含まれている。さらにまた、その被造物中で最も恵まれたものである人間に対してさえ、自然がその贈り物に関して平等に大盤振る舞いをしてくれているわけでもない。「与えられた」世界に対する感謝の念から生まれる慎ましやかさは、世界内のすべての物事がなんであれ我々が欲するままに、あるいは案ずるままに利用されるのを待っているわけではないことを、我々にわからせてくれるかもしれない。しかし、慎ましやかさは、それだけをもってしては、どれが手をかけてよいもので、どれが手を触れずに残しておかなければならないものであるかを教えてはくれない。天与の恵みに対する敬意は、どの恵みがあるがままに受け入れるべきものであり、どの恵みが使用したり訓練したりして向上させるべきものであり、どの恵みが克己心を発揮したり薬物を投与したりして改善するべきものであり、どの恵みがペストのように対抗するべきものであるのか、それらを区別する術を教えてはくれない。それゆえ、生物医学の力を適切に使用するための導きの糸を見出すには、自然の恵みに対する一般的な感謝の念だけではなく、それに加えて何かもう一つのものが必要なのである[5]。

我々に与えられている本性の中で、自然からの恵みであるという事実を超えて、大切なものは何だろう。我々が世界と取り組む仕方の中で本質的に善なるもの、尊厳をもつものは何だろう。

ここでできるのは解決への方向性を示すことだけである。最も重要なのは人倫についての合理的認識であるが、その人倫は通俗的なものではなく、カントが示しているような意味で哲学的なものでなければならない。『治療を超えて』において米国大統領倫理評議会は人倫（morality）が重要であると指摘している。しかし、評議会がいう人倫は通俗的なもの、主観的なもの、仮定的なもの、実用的なもの、経験的なもの、他律的なものである。それはカントが幸福の原則に分類した道徳感情の原則に基づいているのだが、いかなる経験的原則を取り上げてみても、それが約束するのは我々の上々の生活への貢献だからである。さらに、仮定的な人倫は、我々にとって客観的に最善なものは何かということを決して教えてくれない。しかし見出さなければならないのは、人間本性の中の自然の恵みであるという事実を越えて大切なもの、世界との取り組みの仕方で本質的に善なるもの、尊厳あるものである。それゆえ、我々には大統領評議会とは別の道をたどる必要がある。我々は「幸福の最上原理」から一旦離れて、「人倫性の最上原理」に沈潜してみてはどうだろうか。我々自身の実践理性が命じる実践的命法に完全に従ってみてはどうだろうか。「自分の人格のうちにも、他のどのような人の人格のうちにも存在する人間性を、決して単に手段としてではなく、常に同時に目的として遇するよう行為」[6]してみてはどうだろうか。そのときに初めて大切なもの、尊厳あるものが見つかる可能性が生まれるのではないだろうか。

〈注〉

[1] The President Council on Bioethics, *Beyond Therapy—biotechnology and the pursuit of happiness*, Dana Press, 2003, p.16　（レオン・R・カス編著『治療を超えて

—バイオテクノロジーと幸福の追求　大統領生命倫理評議会報告書』倉持武監訳、青木書店、2005 年、15 頁）

[2] ibid. p.10（同 12 頁）

[3] ibid. p.97（同 92 頁） 今日、400 万人弱のアメリカの子どもがリタリンもしくはその類似薬を日常的に服用していると見積もられているが、それらのリタリンが治療のために使われているのか、非‐治療的（行動変容のため）に使われているのか、区別するのは非常に難しい。リタリンは「治療」と「強化」が実際には互いに重なり合う範疇であることを示している。

[4] ibid. p.331（同 356 頁）

[5] ibid. pp.325~326（同 350 頁）

[6] Kant, I., *Grundlegung zur Metaphysic der Sitten*, Walter de Gruyter & Co. 1968, S.429　（カント『人倫の形而上学の基礎づけ』平田俊博訳、理想社、カント全集第 7 巻、2000 年、65 頁）